
とある学園都市で学園黙示録

晃甫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園都市で学園黙示録

【Nコード】

N6229Q

【作者名】

晃甫

【あらすじ】

柄にもなく子供を救おうとして死んでしまった主人公、

九十九 つくもおうか 桜華

しかし彼の魂はまだ死んでおらず突然現れた神様に転生を勧められ“とある魔術の禁書目録”と“学園黙示録”の交わるはずのない二つの物語が交差する世界に転生することに――！？

この小説はとある魔術の禁書目録、学園黙示録のクロス作品で
チートのオリ主を中心に進んでいくものです。

プロローグ（前書き）

なんだかアイデアが出てきたため書いてしまいました。

以前から私の小説を読んでくれている方はこんにちわ。

そうでない方は初めまして。

基本この小説は気が向けば更新、という形になると思いますが更新はしていくつもりですのでよろしくお願いします。

プロローグ

ある日、俺は死んだ。

柄にもなく車に轢かれそうになっていた小さな男の子を助けようとして。

生涯22年、全くつまらない人生だった。

高校を中退した俺はいつのまにか暴力団に所属し幹部にまで登り詰めるほどになっていた。

毎日毎日殴り合ったり、殺し合ったり。

……だけどそんな毎日は退屈以外の何物でもなかった。

気まぐれ。

なんで男の子を助けようとしたかを問われればこう答えるしかない。

平凡で代わり映えない日常に飽き飽きしていた俺は何か変わるキツカケが欲しかったのかもしれない。

もしかしたら別の生き方もあったのかもしれない。

そう思ったらいつのまにか勝手に身体が動いていて、気づいたら跳ねられて血の海だった。

『ああ…俺死ぬんだな…せめて次生まれ変わるときは、退屈しない

人生が送れますように……。』

目の前に広がる血の海と小さな男の子、そしてそれを取り囲む野次馬たちを最期に、俺の視界は真っ暗になった。

「……………ん？」

何かがおかしい。

自分は死んだ、確かにその実感はある。

あの出血量では完璧に失血死だろうし何よりも跳ねられた感覚が今なお身体に残っている。

……それなのに、俺は無傷で何もないだっ広い空間に1人立っている。

「……………どうなってんだ？」

理解が追いつかない。ここがどこなのか、死んだはずの自分が何故無傷で立っているのか。

「やあ、青年。」

不意に背後から声をかけられた。

振り返ってみればそこには真っ白な服をきた見た目中学生ほどの少女。目をひく点を言えば蒼い瞳に絹のようにサラサラな金の髪の毛

だろう。

「誰だお前？」

暴力団に所属していた故の性なのか、知らない人間に会ったらとりあえずメンチを切ってしまう。

「少女に向かってメンチを切るな。そうだなあ、まあ君らが言うところの神様ってとこかな？」

神様？このちっこいのが？冗談はよしてくれ。

「何失礼なこと考えてんだよ。」

「！？人の心が読めるのか！？」

「だから神様だっつってんじゃないよ。」

なんだか機嫌が悪くなってきた神様を鎮めるためにとりあえず話を進める。

「で？その神様が死んじゃった俺に何の用だよ。」

「君はまだ死んでないよ。」

「は？」

突然のことに無意識のうちに呆けた声がでてしまった。

「まあ肉体は死んじゃってるんだけどね、魂だけはまだ生きてるん

だよ。」

「じゃあ何か？俺は生き返れるってことか？」

「まあ肉体を変えればね。」

突然すぎて話についていけない。そもそもこいつは本当に神様なのだろうか。

「あ、ちなみにここは現世と霊界の中間点、言ってみれば三途の川の目の前ってところかな。」

なんとなく理解できた彼は話を切り出す。

「せっかく生き返れるって話だが、遠慮しとく。俺はあんな退屈な世界で人生を過ごすつもりはねえよ。」

あんな退屈で平凡な毎日、わざわざ生き返ってまで戻ろうとは思えなかったのだ。

それを聞いた（自称）神様は、

「なら転生してみる？」

「転生？」

「そ。今までの世界がイヤだって言うんなら特別に違う世界に転生させてあげるよ。」

思ってもみなかった展開。彼としては退屈しない世界であるのなら

万々歳なのだが。

「そんなことできるのかよ。」

「私を誰だと思ってるのよ、神様よ!？そんなのちよろいわ。」

得意気に言い放つ（自称）神様。どうやら本当に転生させられるらしい。

「退屈しない世界に行けるんなら、転生させてくれ。」

「はいはい、何か希望とかあるー?」

「退屈しないこと。」

「そうねー、ならとあるの世界とかは?」

とある魔術の禁書目録――

彼は現世ではそれを知っていた。一時期暴力団でライトノベルが何故か流行った時期があり彼もその流行に乗って全巻読破したからだ。

「とあるか…、いいな、退屈しないですみそうだし。」

「じゃあ決まりね、能力の希望は?」

「退屈しない程度 of 能力をくれ。」

「じゃあこっちで適当に決めるね。」

そこでふと彼は気づいた。

彼は全巻読破したためあらすじを全て分かってしまっている。先が見えている人生などおもしろくもなんともない。

「なあやっぱりー」

「ん？ そんなことわかってるって、私がそんなこと考えてないとも思ったわけ？」

思ったよりも切れ者だった。

「君の場合特別にもう一つ世界を混同させるよ、学園黙示録の世界をね。」

「学園黙示録？」

彼はこっちの物語はさわり程度しか知らない。

「あのゾンビがでてくるやつか？」

「そうそれ、おもしろそうでしょ？」

確かにこれならば自分が先の展開を知らないので退屈はしなさそうだ。

何より二つの世界が交わるというのが興味深い。

「ならそれで頼む。」

「OK、基本的にとあるをベースにして途中から黙示録が干渉する

ような感じになるから。」

「わかった。」

「あ、最後にもう一つ。名前は どうする？ 変えようと思えば変えられるよ？」

「――…いや、名前は このままでいいわ。せっかく親から貰った名前なんだからな。」

「そうだね、私も そのほうが いいと思うよ。よっと」

神様が 軽く手を振ると 彼の後ろに 真っ白な扉が現れた。

「それをくぐれば 新しい人生が待ってるよ。」

彼は扉をまっすぐに見つめる。

息を整え、 ゆっくりと扉に手をかける。

ギイッ

と音をたて開かれる扉、 先は眩しくて何も見えない。

「ありがとな、行ってくるわ。」

最後に振り返った彼は 神様に礼を行って 扉の向こうへと姿を消した。

「行ってらっしゃい、九十九 桜華^{つくもおつか}。今度こそ、退屈しない人生を。」

そう言い残し神様はその場から姿を消した。

九十九 桜華

享年22

身長177cm

体重66kg

彼の退屈しない二度目の人生が始まる。

第一話 学園都市へ（前書き）

遅れました（一”一；）

主人公の能力を考えていた為なのですが皆さまのお気に召すかが心配です。

ではどうぞ。

第一話 学園都市へ

「…ん。」

ひんやりとした床の感触、カタカタと叩かれるキーボードの音。そんな空間の中、彼、九十九桜華は目を覚ました。

「ここ…どこだ…？」

なんだかひどく頭が重い。異世界にきた副作用だろうか。

彼のいる空間は窓もドアもない空間。

そして目の前にあるのは円筒の巨大な水槽。

原作を知っていた桜華はこの場所がどこなのかを知っていた。

「……学園都市統括理事長の本拠地、窓の無いビル

「やっと気がついたか。」

そして水槽の中から放たれる言葉。

逆さで漂うその人物を、桜華は知っていた。

「アレイスター…!!」

「ほお、私を知っているのか。成程な」

桜華の一言に納得したといった表情で返すアレイスター。

「何で俺はこんなところにいるんだ？」

「それは君が一番よくわかっているのではないか？」

「！：お前一体どこまで知ってるんだ？」

「さあな。だが少なくとも君について知らぬことはないと言っておう」

特に表情も変えず淡々と語るアレイスター。こいつ俺が転生者だっ
てことまで知ってやがるのか？

「それよりも私が興味があるのは君の能力だよ。九十九桜華」

能力？

ああ、何か神様が退屈しない程度の能力をくれてたんだっけか。

「退屈しない？そんな程度で済む能力ではないぞ」

こいつ人の心まで読めるのかよ：

「どんな能力なんだ？」

「ふむ：能力名だけを言ってしまうば“リダクションオーバー超越還元”
と言ったところだ」

リダクションオーバー
「超越還元？」

なんだそれ？

原作じゃ聞いたこともないな。

「還元とはどういう意味か知っているか？」

「元に戻すとかそんなんだろ」

「おお知っていたか」

馬鹿にしすぎだこの逆さまロン毛野郎。

「まあ簡単に言うとな、君の能力は相手のAIM拡散力場に干渉することでその能力を使用前の状態、つまり何もない状態に還元することができるのだよ」

「それただの還元じゃん」

超越の意味がわからないじゃんね

「まあ早まるな。君の能力の恐ろしいところはこれからだ。君の場合、還元した能力を自らのAIM拡散力場に取り込むことでその能力を使用者以上の力で再利用することができるのだよ」

「…? ? ?」

「君はバカなのか。バカはバカなりにバカの頭をフルに使用して考えろ」

「おいバカバカ言いすぎたぞバカ野郎」

「バカの君にもう少しわかりやすく説明してやろう」

表情は変わらないがなんだか呆れているように見えなくもない表情をこちらに向けるアレイスター。

完全にバカにされている。

「つまりだ。君が還元した能力に君自身の力が上乘せられて使えるということだ」

「まじか。それってほぼチートじゃねえか」

「ただし使い勝手が言いとはいわん。」

「どうしてだ？」

「相手の能力を還元するには直接相手のAIM拡散力場に干渉しなくてはならん。つまりまず相手に能力を使わせなくては話にならんのだ」

「ってことはあれか？相手が先に能力使わねえと俺無能力者みたいなもんか！？」

「そういうことになるな」

「めんどくさ！！神様ちょーめんどくせーよこの能力！！」

思わず天井に向かって叫んでしまう桜華。

「もちろんデメリットばかりではない」

「まだなんかあんのか？」

「1度記録したA I M拡散力場はそのまま残り続けるからな。君は還元した数だけ能力を使えるぞ。」

「おお!!」

「ただし」

持ち上げておいて一気に叩き落とすつもりですかこの野郎。

「記録する場所はいくまで君の脳内だからな。せいぜい3つが限界だろう。それ以降は還元した順番に調整されていくぞ」

「つまり？」

「…もう説明が面倒になってきたんだか。つまり、君は還元はいくらでも行えるしその場で超越還元することができるが通常時に使用できる能力は還元された最新の3つだけだということだ。」

「まあ闘う分には問題ないだろ。それに3つもストックがあるなら充分だ。多重能力者みたいなものだしな」

「ふむ。言ってしまうえばそうなるな」

「そう言えば俺これからどうなるんだ？」

「…君は自分の身体をまず確かめてみる」

完全に呆れているの溜め息が聞こえてきそうな表情でアレイスター

が言う。

そう言えば何だか微妙に目線が低い気がする。

「今の君は14歳の中学二年生だ」

「…またすげえ若返ったな」

精神的には22歳なのでなんだか微妙に身体とズレがある気がする。

「こちらで転校手続きはすでに済ませてある。部屋も用意してあるからそこを使うといい」

「わかった。ちなみにだが俺のレベルって…」

「言うまでもないが君の能力は間違いなくこの学園都市で最強だ」

「まじでか!!」

なんだかんだでテンションがあがる。

やっぱり男として超能力者には憧れがある。

「だが君の存在はイレギュラーだからな、レベル5だが序列に組み込むわけにはいかん」

「ええ〜？」

どうせならドバーンと新たな学園都市第1位として堂々と街を歩きたかったんだが。

「そうだな、ではこうしよう。君は幻のレベル5、“第零位”だ。」

おお!! 何かカッコイイなそれ!!

「ただし日常生活において一般人にこのことは極力知らせるな。」

「わかってるよ。俺だってこの世界を壊したくはないからな」

そう。自分というイレギュラーの存在がいるだけで世界は大きく歪んでいるのだ。

それをさらに歪めるような情報をみすます話すわけにはいかない。

「わかっていればいい。」

「おう。なら俺はもう行くぜ」

「ああ。何かあるときは電話したまえ。回線を繋げてやろう」

「はいはい」

そう言って桜華は踵を返して後ろにいた空間移動能力者の元へと向かう。

そこで桜華は最も聞かなくてはならないことに気が付いた。

「なあアレイスター」

振り返りアレイスターに問いかける。

「今は何月何日だ？」

これが最も重要だ。

原作を知っている以上イベントに関わるには日にちを把握していかなくてはならない。そのためにこの世界に來たのだから。

「7月10日だ」

成程、原作開始の少し前か。後はどこで黙示録が介入してくるかだよな。

「わかった。サンキュー」

それだけ言い残し、桜華はテレポーターとともに窓のないビルを後にした。

第一話 学園都市へ（後書き）

次回は原作キャラと遭遇します。

第二話 7月10日（前書き）

一話を投稿してから気付いたんですが学園黙示録が始まるのって春ですよね…

ということとで現在7月の学園都市とクロスするのは来年4月になりそうです。

…また長いなこりや

第二話 7月10日

学園都市統括理事長の本拠地、窓のないビルから案内人とともにテレポートで移動し、路地裏へとやって来た桜華と案内人。

「ここは：第7学区あたりか？」

辺りを見回して場所を確認する桜華。

それを隣で見ていた案内人がふと話しかけてきた。

「アナタ、何者？」

桜華がそちらを向いてみるとものすごい怪訝な顔をしている。彼は案内人である彼女のことを原作知識で知っていた。

結標淡希

何者？と聞かれて素直に転生者ですと二つ返事で言えるわけもないので、桜華は適当に話をはぐらかすことにする。

「うーん、しがない学生ってとこだな」

「ふざけないで。アレイスターと直接話せる人間がただの学生なわけじゃないじゃない」

彼女は桜華とアレイスターが何を話していたのかは知らない。しかしこの学園都市でアレイスターの存在を知っている者など稀有なため、結標の疑惑も当然と言えば当然である。

「本当に何にもないしがない学生だ」

「なら何故アレイスターのことを知っているのよ」

「まあ成り行きだな」

「成り行き？」

「まあそんな話なんかどうでもいいーじゃねえか」

正直、今九十九桜華はものすごく感動していた。

小説の中でしか知らなかった人物が今こうして目の前にいて自分と会話をしているのだから。

冷静を装って会話してはいるものの内心はとんでもなく興奮していたのだ。

——……それがうっかり口を滑らしてしまう原因となったりもするわけで。

「……まあいいわ。どうせアナタとはこれからも会うことになりそうだし」

「おう。じゃあな、結標」

「……何で私の名前を知っているの」

（あ…、やべ）

「あ、アレイスターから聞いたからな」

咄嗟に出した答えとしては中々にナイスアドリブだ俺。

「ふうん…。まあいいわ、それじゃ」

そう言って結標はレポートを使わずに何処かへ歩いていってしま

った。

「…ふう、あつぶねー。いきなりバレるとこだったじゃねえか」

胸を撫で下ろした桜華はとりあえず路地裏から出て大きな通りへ出るべく歩き出す。

と、流石は路地裏とでも言うべきか。

何人かの体格のいい男が制服を着た女の子をナンパ、もとい脅迫している現場にバツタリ遭遇した。

いきなりかよ、神様。

俺こつちの世界でも殴る蹴るの仕事に好かれてんのかな。

ヤクザとは義理堅い生き物だ。

目の前で何の理由もなく襲われたりしている人間がいれば真っ先に助ける。

それ故、彼は前世ではその実力と人望も相まって22歳にして大御所の幹部にまで登り詰めたのである。

まあ今は14歳の身体になってはいるが、その性格は何も変わっていない。

桜華は軽く息を吐いて、高校生だか大学生だかのチンピラたちに声をかける。

「おい。その子困ってんじゃねえか、離してやれよ」

その言葉にチンピラたちは少女から後ろに立っていた少年へと振り

返る。

「ああ？何だこのガキ。とっとと消えな。」

「ここはてめえみたいながきが来ていい場所じゃねえよ！！」

「オラ！！痛い目見ねえうちに消えな！！」

それぞれ言いたい放題のチンピラたち。

もう1度言うが、彼、九十九桜華は元ヤクザである。

気はとつてもとつても短く、この手の挑発には乗りやすい。

事実、彼は今非常にイライラしている。

爆発寸前だ。

「…もう1度だけチャンスやる。その子を置いてさっさと消えろ
クソ野郎…」

ミシミシと音をたてながら拳を握り締め、必死に堪える。

だが、チンピラたちはそんなことを知る由もなく。

「ああ！？生意気言うじゃねえかガキが！！殺されても文句言うん
じゃねえぞ！！」

今の桜華の発言に頭にきたのかチンピラの1人が身体から紫電を走
らせ電撃の槍をこちらに投げてきた。

（電撃使いか…）

そしてその電撃の槍が桜華の身体に直撃する。

「ビヤハハ！！バカが、俺はレベル3の電撃使い（エレクトロマスタ）だ！！てめえなんかが敵う相手じゃねえんだよ！！」

勝利を確信したのか意気揚々と言い放つチンピラ。

「…ったくよお」

だが、九十九桜華はさっきと変わらず悠然とそこに立っていた。

「なっ！？何で無傷なんだよ！！」

倒れるどころか傷1つない桜華を見てチンピラは驚きとともに恐怖を覚えた。

「っつーかよお…」

桜華はミシミシと拳を握り潰すくらいに強く握り締め、言った。

「俺じゃなかったら死んでたかもしれねえんだぞごらあああああ
！！！！」

思いきり振りかぶった拳はそのまま真っ直ぐに電撃使いのチンピラの顔面へと吸い込まれていく。

ゴッ！！

「ぶへらっ！！」

顔を殴られたチンピラはそのまま路地裏の壁に激突し動かなくなる。

「なっ、てめえ能力者か!?!」

残っていた2人のチンピラが桜華から数歩後退り言う。

「バカが、これはただの腕力だクソ野郎があああ!?!」

もう1発。

前にいたチンピラの腹部に思いきり拳をぶち込む。

「ヒッ…」

残るはあと1人。

悲鳴を洩らすこのチンピラだけだ。

「さあ、遺言はあるか?」

「て、てめえ何者だよ…」

「知るか」

桜華の拳が最後のチンピラの脳を揺らした。

＊

「…やべ、やりすぎたかな」

周囲に横たわる屍（のように動かないチンピラ）。

（早くこっから立ち去らねえと風紀委員が出張ってくるかもしれないねえなあ…）

とここから立ち去ろうとした時、絡まっていた少女に声を掛けられた。

「あ、あの！ありがとうございます！」

「ああ気にすんなよ。それよりケガとかないか？」

「え？あ、はい大丈夫です」

「そりゃよかった」

改めて少女を見ればそれは中学生くらいの女の子で、激しく見覚えのある制服を身に纏っていた。
というか、彼はこの少女を知っている。

「…湾内さん？」

「？どうして私の名前をご存知で？」

「いや、なんでもないんだ」

適当に誤魔化す桜華だが、何だか嫌な予感がしてきた。

（湾内さんていつも泡浮さんと一緒にいる子だよなあ）

確か以前は絡まれているところを御坂美琴に助けられていた気がする。

よく絡まれる子なんだなあ

「あ、あのー…」

「なに？」

湾内さんが何か言いたそうだったのでとりあえず聞いてみる。

「お名前を教えて頂けないでしょうか？」

何だそんなことかと思い桜華は自己紹介する。

「俺は九十九桜華だ」

「湾内絹保と申します、助けて頂き本当にありがとうございました」

丁寧にお辞儀する湾内さんを見て何だか無性に愛らしさを覚える。

…断っておくが、俺は変態ロリコンではない。

「じゃ、俺はこのへんで失礼するわ」

そう言い残して路地裏から立ち去ろうとした瞬間、聞きなれた声がこだました。

「風紀委員ですの！！通報を受けて参りました。そこの方、ご同行願いますわよ」

振り返ってみるとそこには予想通り風紀委員、白井黒子の姿があるわけで、倒れているチンピラ3人をやったのも俺だからあながち間

違いじゃないんだけどやっぱり連行されるのは嫌なので――……

「あー！ちょっとお待ちなさいなー！」

ここは逃げに徹します。

「うわっ！！」

突然視界が逆さまになった。それが白井にされたことだと気づくのにそう時間はかからなかった。

「何故逃げるんですの？」

路地裏に仰向けに倒れている状態で仁王立ちで言う白井。

なんというかアレだ、スカートの中がちらちらと――……

「あー、風紀委員さん？そのスカートの短さは如何なものかと思うんだが」

「そんなことはどうでもいいんですの。とりあえずついてきてもらいますわよ」

ガチャンッ

桜華の手に拘束具がはめられた。

「うえ！？オイ俺なんもしてないって！！」

「話は支部で聴きますわ。ゆっくりと」

後半部分をやけにいい笑顔で言う白井。

桜華はさっきの嫌な予感がこれであったことを確信する。

ズルズルと引きずるような形で連行されていく俺。

そこで白井がようやく被害者の少女が湾内さんであるということに
気付いた。

「湾内さんではありませんの。では被害にあったというのはアナタ
だったんですわね」

「まあ白井さん。あの、その方をどちらに？」

引きずられている桜華を見て心配そうに声を掛けてくれる湾内さん。

「この方は私を守って下さったんです」

「あら、そうでしたの。では事情聴取ということになりますわね」

「風紀委員さん。誤解が解けたんだからこの手錠外してくれよ」

「無理ですの。またいつ逃げるかわかったもんじゃありませんし」

最早何を言ってもムダだろうと桜華は諦める。

いつぞやの銀行強盗が言っていた身も心も切り刻んで再起不能にする
最悪の腹黒テレポーターというのもあながち間違っていないんだな
と密かに思う桜華。

そんな彼と彼を引きずる白井、被害者の湾内さんの3人は一路風紀

委員第177支部へと向かった。

第二話 7月10日（後書き）

次回はあの花飾りと出会います。

第三話 電撃使い（前書き）

花とビリビリと出会います。

第三話 電撃使い

連れてこられたのは風紀委員第一七七支部。柵川中学の敷地内にあるこの詰所に、九十九桜華は拘束された状態で（強引に）連れてこられた。

電子ロックを解除し、白井と桜華、湾内さんの三人が内部へと入る。

「初春く、只今戻りましたの〜」

「あ、お帰りなさい白井さん〜」

向こうのデスクから飴玉を転がしたかのような甘ったるい声が聞こえてきた。

原作知識を脳内に詰め込んでいる元ヤクザの桜華は誰だか直感する。

というかさつき白井が名前呼んでたけど。

向こうから現れたのは頭に花飾りを乗つけた制服を着た少女、初春飾利。

「その方たちは誰なんですか？」

尋問用に座らされた桜華と隣に座る湾内さんを見て首を傾げる初春。

「この野蛮人は過剰防衛の現行犯ですよ」

「誰が野蛮人だオイ！！俺は彼女を助けたんですけど！？？」

隣で苦笑しながら湾内さんはただ見守っている。お願いだから何か言っしてほしい。

「とりあえず名前をお聞かせ願えますか？」

「九十九桜華だ」

「初春、バンクを調べてくださいな」

「ちょっと待って下さいね」

白井の隣にパソコンを置いて座った白井がバンクへのアクセスを開始する。

（…あれ？ちょっと待てよ？俺ってこの世界でどういう扱いなんだ？）

もしかしたら身元がバレて学園都市から追放されるかもしれないか
思い少しばかり緊張していると……

「…えーっと、あ、ありました。九十九桜華さん、転入生ですね。

明日付けで柵川中学に転入することになっています」

（あ…そんな風になってんのか。やるなアレイスター、根回しは完璧
ってか）

「あら、では学園都市に来て日が浅いんですの？」

「まあな。今日来たばかりだ」

「まあ、そうだったんですか？」

ここにきてようやく口を開く湾内さん。

「まあアナタが湾内さんを守ったというのは彼女の証言からも解っていますし、転入生で右も左も解らない状態であったというなら今日は目を瞑りますわ」

「まじか。よかったよかった」

ふーっ、と息を吐いて背もたれへもたれかかる桜華。

「九十九さんて二年生なんですね」

「年上でしたの」

「ああ、それと他人行儀っぽいから俺のことは桜華でいいぞ」

「わかりました桜華さん」

屈託のない笑顔で微笑む初春。
癒されるわー。

「アナタは能力開発は受けてるんですの？」

「ああ、俺の能力は…」

そこまで言いかけてはたと止まる。

（能力のことなんて説明すりゃいいんだ…？）

「あゝ、えゝとだな…」

言い淀む桜華を横目に、カタカタとキーボードを叩いていた初春が代わりに答える。

「ありました。九十九桜華さん、レベル1の“オートデリット自動消滅”とあります。」

「…そう、そんなやつだ」

全く聞いたこともないような能力名だったが、どうせアレイスターがまた上手くやったんだろうと思いきその話にのっておく。

「それはどんな能力なんですか？」

「半径5cm以内の範囲で能力を消滅させる能力みたいです。高度な演算能力を必要とするそうなので使用制限があるみたいですけど。」

初春が画面をスクロールさせながら白井の質問に答えていく初春。体力面は絶望的なのに情報面に関しては本当にスゴい。

「では桜華さんは何故学園都市に？」

「…」

また白井は鋭いところを切り込んでくるなあ。

「…家族の都合でな。いろいろあってこっちに來たんだよ」

これといった理由が思いつかなかったためそれらしい理由をつけて誤魔化す桜華。

「…まあいいですわ」

「そういえばさ、そろそろコレ外してくれよ」

そう言って未だに腕に装着されたままの拘束具を机の上にガシャンと置く。

「着けたままでも問題ないですわよ？」

「オイそれということだ白井この野郎」

「まあ冗談はこのくらいにして」

「冗談に聞こえねえんだよ……」

渋々拘束具を外す白井に嫌なモノを感じる桜華。

「もう帰っていいか？」

「ええ結構ですわ。わたくしも湾内さんを寮まで送らなくてはなりませんし」

（ん——……？）

何か重要なことを見逃している気がする。なんだろうなーすげー引

つかかってんだけど。

「そういえば桜華さんは柵川中の寮に住むんですか？」

それだ!!!

俺の家って何処だ？

「いやーまだ見てないから分からないんだよなあ……」

「なら今から調べてみましょうか。もう用意はしてあるはずですよ
ね？」

「多分」

再び初春がキーボードをカタカタと叩きだす。

「あ、ありましたよ。えーと第七学区の……私の住むマンションの
隣ですね」

プリントアウトした地図を桜華に渡しながら初春が言う。

「お、サンキュー」

「いえ、ではまた明日」

「あれ？初春はまだ帰らないのか？」

「まだ調べ物が残ってますから……」

「そっか。じゃまた明日な」

何の事を調べているのか少し気になっていたが深入りはせずに俺は初春から地図を受け取って支部を出た。

その帰り道。

「――……俺ってほんとなんでこんな場面に出くわしちゃうわけ？」

学園都市にやってきてまだ1日目だというのに……

桜華の目の前には10人程の明らかにヤンキーですといった男たち、その先には湾内さんと同じ常盤台の制服を着た少女。

（なんだかなあ、最近常盤台の娘は絡まれるのがブームだったりするのか？）

そう思いつつも桜華の足は自然とそのヤンキーたちの所へと進んでいく。

（何か上条さんみたいだな俺）

そんなことを思っただけで薄く笑いながら、桜華は近くにいたヤンキーの一人を思いきり蹴飛ばした。

「おらあ!!」

「どうぶろう!?!」

頭にバンダナをしていたヤンキーがその蹴りで踞る。

「な、てめェ何のつもりだ!!」

リーダーらしいスキンヘッドのヤンキーが桜華を見て叫ぶ。

「あのさあ、俺もう今日二回目なんだよ」

ハアと溜め息をついて面倒くさそうに言い放つ。

「よってたかって中学生を囲みやがって、お前らはロリコンか？少女大好きですかこの野郎」

「んだとこのクソガキが!!」

頭に血がのぼったヤンキーの一人が桜華に向かって鉄パイプを振りかざす。

「丁度いい、お前ら俺の能力の実験台になってもらうぜ」

そう言って桜華は目の前のヤンキーに向かって先程還元して脳内にストックしておいた能力を発動する。

「喰らいやがれ!!」

そう言うとかざした桜華の右手から電撃が放たれ男に直撃、男は黒焦げになってその場に力無く倒れる。

「うお、本当に使えた能力!!」

能力が使えたことにテンションが上がっている桜華。

「こいつ能力者か!!」

「電撃使い（エレクトロマスター）！？レベル4クラスだぞ今の電撃!!」

本当に自分の演算能力によって力が上乘せされるようだ。

「困め!! 大人数でやっちゃえば大したことねえ!!」

スキンヘッドのハゲ（俺命名）が合図をすると残ったヤンキーたちが一斉に集まって円をつくる。

「面倒くせえなあ」

大した警戒をするわけでもなく、退屈そうに桜華が言う。先程絡まれていた少女に向かうためヤンキーは全てこちらにいるため少女は逃げただろうかと桜華がちらっとそちらを向けば、

——……何だか頭からバツチンバツチン電撃を走らせている少女の姿。ここにきてようやく彼は気づいた。彼女が誰だったのかを。

（やべ!! 顔までよく見えなかったから普通に割って入ったけどコイツは——……）

「……私を無視すんなあああああ!!」

逃げようとかそんなことを思うよりも前に、常盤台の少女の叫びと共に辺り一面に電撃が迸った。

桜華の周囲にいたヤンキーはその一撃で完全にのされてしまっている。

……ああ、神様。

俺はこんな上条さんの初対面は望んでいませんでしたよ。

どうせならもっとお嬢様らしい店とかで——……

「ちょっとアンタ!!」

鼻息荒くこちらにズカズカと歩いてくる少女にちらりと目を向けて俺はこの日最大の溜め息をついた。

「……なんだよ」

「勝手に人の獲物を横取りしてんじゃないわよ!!」

うわこいつ確信犯かよ。

「それより、アンタも電撃使いなのね」

なんだか目をギラギラさせてこちらを見つめてくる常盤台の少女。これは原作通りならあのパターンだ。

「私と勝負しなさい!!」

やっぱりな……

あまりにも原作通りすぎて反応のしようがない。桜華は目の前少女、御坂美琴を見て思わず叫んでしまいそうになる。

（不幸だ――）

彼の学園都市生活1日目はまだ終わりそうにない。

第三話 電撃使い（後書き）

全然話が進まない……

早く学園黙示録のプログも書きたいのに……

第四話 逃げるが勝ち（前書き）

短いです；

本日2話投稿。

後でキャラ設定を投下する予定。

第四話 逃げるが勝ち

あらずじ

なんだかビリビリした女の子に勝負を挑まれました。

「勝負しなさい!!」

時刻はそろそろ午後6時に差し掛かろうかというところ。

俺の目の前にいる少女、御坂美琴は意気揚々と指差して言い放った。

「……はあ」

「なんで溜め息なのよ!!」

「ビリビリさあ……」

「御坂美琴よ!!」

「御坂さあ、何でそんな突っかかるの?」

「アンタなかなか強そうだからよ」

「御坂って超電磁砲の御坂美琴だろ? 俺なんか勝てるわけねえじゃんか」

本当は勝てたりするんだけど面倒ごとは御免なのでのりくらりとやり過ごすことに。

「うるさいわね。男ならしゃきっとしなさいよ!! アンタも電撃使いなんでしょ?」

「いや違うって」

「? アンタさっき電撃飛ばしてたじゃない」

「ありゃ俺の能力だよ（あ、やべ……）……まあレベル1程度だけ

どな」

危ねー自分の本当の能力うっかり喋っちまうところだった。

「嘘ね。さっきの少なくとも大能力者クラスはあったわよ」

「そう見えただけだって」

くそう、しつこい。

いい加減に新しいマンションに行ってぐっすり眠りたいのに。

――……奥の手を使うか。

そう決断した俺は御坂の後ろを指差して大声で叫ぶ。

「あゝゝ!! あんなどころにツンツン頭の少年が!!」

「え!?! どこよ!?!」

(今のうちに、)

実は結標の座標移動も一緒に移動した際に還元して取り込んであったためそれを使ってその場からテレポートする。

当然ツンツン頭の少年などいないため御坂が憤って振り返ってみれば、

「何よどこにもいないじゃな……あれ?」

先程の少年の姿などどこにもなく、

「逃げられたー！！」

御坂美琴の叫びだけだ夕方学園都市に響き渡った。

＊

「よっと」

地図を頼りに自分のマンション近くまでテレポートした俺は歩いてマンションを探していた。

「しかしテレポートってかなり演算能力使うんだな……頭痛くなってきたかも。……お、これか」

ようやく目の前にまだ新しそうなマンションが姿を現した。中に入り、管理人に経緯を話して部屋の鍵をもらう。

「あー疲れた」

部屋の鍵を開けるなり俺はぐったりと床に寝そべった。

1日目だけでいろんなことがありすぎた。退屈しない世界がいいとは確かにいったがいくらなんでもこれは身体がもたない。更に今後学園黙示録などという死亡フラグ満載な物語まで介入してくるとい

うのだから先が思いやられる。

「あゝ、もう今日は寝るかなあ」

時刻はまだ午後6時過ぎだが転生のせいか身体にはどっと疲れが溜まっている。

明日からは中学にも通わなくてはならないため今のうちに疲れを取り除いておいたほうがいいだろう。

と、そんなことを考えていると、不意に家の電話が鳴った。

不審に思いつつも受話器をとる。

「もしもし」

『やあ』

「何だアレイスターか」

『1日目はどうだったかな?』

「どうもこうも疲れが溜まってばかりだよ」

『退屈しないだろう?』

「まあな。で?俺に何か用か?」

『ふむ、君の能力についてなのだが』

「なんだ、まだ何か使いづらいオプション付いてんのか?」

『君が還元して脳内にストックした能力があるだろう?』

「ああ」

『それにも使用制限があってね。元々の能力者の貯蔵している1日分の能力しか使えない』

「つまり使い捨てってことかよ」

『まあそういうことだ。そのストックが切れてもう1度同じ能力を使おうと思えば同じ攻撃を還元しなくてはならない』

「うっわ燃費悪」

『それが君の能力なのだ。仕方ないだろう』

「それは分かってるけどよ」

『ああそれと、君の部屋に通帳があると思うがそれは好きに使っていい。本来ならレベル5の君には相応の金額が振り込まれている筈だ』

当たりを見回して机の上に置かれていた通帳を発見した俺は中身を見て絶句した。

——…何か0が見たこともない数くつついている。

「いくらなんでも多すぎじゃないかこれ」

『気にすることはない。その程度はした金だよ』

うわ、こんな金額をはした金って言いやがったあの野郎。

「用件はそれだけか？」

『ああ、くれぐれも自分が8人目のレベル5であるとはれるなよ』

「ばれる時はばれるぞ？」

『……まあそれも面白いか』

ガチャンッ

ツーッー

通話が切られた。

何はともあれ何とか転生1日目を終わることができそうだ。

学園黙示録のときのことも考えて色々と下準備もしておかないといけないよな。

いやそれよりも目先の原作介入についてか？もういっそ原作ぶち壊すか、俺がいる時点で基盤である原作はぶっ壊れているわけだし。

「ふう、退屈する心配はこれっぽっちもなさそうだ」

用意されていたベッドにダイブして薄く笑いながら呟く。

ベッドに寝転がると疲れからか睡魔が襲いかかってくるが、今はそれが少し心地よい。

明日からの学校頑張るか

そんな事を思いながら、襲いかかる睡魔に身を任せ俺は眠りについた。

第四話 逃げるが勝ち（後書き）

やっと1日目終わった。
感想随時受付中です。

主人公設定

九十九桜華

(つくもおうか)

前世で柄にもなく子供を助けようとした結果死亡。しかし魂だけは死んでおらず肉体だけを変えてとあると学園黙示録がクロスする世界に転生することに。

前世では若くして組の幹部にまで登り詰める程の実力と人望があった。

享年22歳

身長…177cm

体重…66kg

←

転生後

身長…170cm

体重…60kg

転生以前は黒髪の短髪だったが転生後は濃いめのブラウンの髪で少し長め。(青ピ程度)

顔は割りと整っていて所謂美形。

前世では何故か組の中でラノベブームが巻き起こり禁書目録と超電磁砲は読破している。学園黙示録については登場人物とゾンビがでてくるといったさわり程度。

能力は“超越還元”
リダクションオーバー

相手の能力に干渉してその能力に自分の演算能力をプラスした形で使用することができる。また攻撃を還元して使用することも可能。

発電系や発火系などの物理的な能力は攻撃を受け還元することで脳内にストックされるが空間移動系や透視、テレパスなどは相手のAIM拡散力場に干渉して脳内にストックする。

ただし脳内には能力三つ分までしかストックしておくことができない。それ以降は順番に消去されていく。

本来ならばレベル5だが転生者というイレギュラーな存在であり尚且つ多重能力者デュアルスキルに近い存在であるため研究所などからの目を誤魔化す為、原作を必要以上に破壊しないため通常はレベル1の“自動消滅”オートデリと名乗る事に。

利用価値やその利益によれば序列は第一位よりも上の第零位。実力的にもおそらくは学園都市最強。

転生後は14歳として初春と同じ柵川中学に通うことに。

主人公設定（後書き）

これから設定は随時追加していく予定です。

第五話 7月11日（前書き）

短いですがご勘弁を（―”―；）

夏休みが終われば学園黙示録のプログに入りたいと思います。

第五話 7月11日

ピピピピ、ピピピピ

昨日の夜予めセットしておいた目覚まし時計のアラーム音で俺は目を覚ました。

「うーん……」

ベッドから起き上がり腕を掲げて大きく伸びをする。

カーテンを開き、太陽の光を全身に浴びて身体を覚醒させる。

時刻は午前7時。

このマンションから転入先の柵川中学までは歩いて10分程度と近い。ため其ほど急ぐ必要もない。

俺はゆっくりとキッチンに向かい冷蔵庫の中から卵とハムを取り出して熱したフライパンに放り込んでハムエッグをつくる。その間にトースターにパンをセットしお茶を注いで待つ。

ちなみに、前世でよく舎弟に手料理を振る舞っていたりした為料理の腕前はなかなか高かったりする。

「いただきます」

焼き上がったトーストの上にハムエッグを乗せて上からマヨネーズをかけて食べる。

うん、美味ですな。

食事を終わるとキッチンを離れクローゼットへと向かう。

中には今日から着る柵川中学の制服が入っているのでそれに着替え

て鏡の前で身なりをチェック。

「……うん、まあこんなもんだよな」

人生二回目の中学の制服に身を包んだ感想は新鮮。これにつぎと思う。学校自体はあまり好きではないが退屈しない人生が送れるのであればそれすらも嬉しく思えてくる。

「よし、行くか」

気持ちを改め鞆を持ち、玄関を出て学校へと向かう。すると丁度マンションから出てきた初春と遭遇した。

「よ、初春」

「あ、おはようございます桜華さん」

とりあえず二人で一緒に学校に行くことに。

「今日からですね」

「ああ、今から楽しみだよ」

「桜華さんなら友達もたくさんできますよ」

ニコツと微笑んでこちらを向く初春。

あーもう可愛いなこんちくしょう!!

あれ？

でもこういう時には大抵あの子が——……

「うーいーはーるっ!!」

ばっさあ

と初春のスカートが御開帳。

見てない見てない、ピンクの水玉なんてこれっぽっちも見えてないよ。

「お、今日はピンクの水玉かあ」

「ひゃわああああ！？さ、佐天さん！！男の人もいるのに何してるんですかッ！！」

顔を真っ赤にして佐天に怒る初春。

その動作さえも可愛いなあオイ。

「えゝいいじゃん。スキんシップは大事だよお？それもういつちょ！！」

「めくらないで下さい！！バサバサしないで下さい！！」

もうこれ苛めなんじゃないかってくらいに初春のスカートをばっさばっさと仰ぐ佐天。

「あれ？そういえばそっちの人は？」

こちらに気づいたのか佐天が初春に尋ねる。

「あ、紹介します。九十九桜華さん、今日から柵川中学に転入するんですよ」

「九十九桜華だ。よろしく」

「あ、佐天涙子です」

そう言って握手する。佐天もなかなか可愛い。

「でも何でそんな人と初春は知り合いなの？……はッ！？まさか彼氏！？」

「ち、違いますよ！！何言ってるんですか佐天さん！！」

全力で否定する初春。なにもそんなにムキにならなくても。でもなんでそんなに顔を真っ赤にしてるんだ？風邪か？

「ふうん、ちなみに桜華さん。今日の初春のパンツは何色でしたか？」

「な、なな、何言ってるんですか佐天さん！！男子に聞くようなことじゃないです！！」

「ピンクの水玉」

「桜華さんも普通に答えないで下さい！！」

何だか收拾がつかなくなってきたので冗談はさておいて初春たちと校舎へと向かう。

「じゃ、俺職員室行かないといけないから」

「はい、ではまた」

「サヨナラ」

初春佐天と別れて職員室へと向かう。

「失礼しまーす。今日から転入する九十九桜華です」

「あ、あなたが九十九くん？私が担任の藤井です。よろしくね」

出てきたのは二十代後半くらいの綺麗な女性だ。ショートカットの黒髪にスーツ姿がよく似合う。

「私は警備員アンチスキルもやっているから何かあったら声をかけてね」

「よろしくお願いします」

「それじゃいきましょうか」

二人は職員室を出て教室へと向かう。時刻はそろそろ8時というところだが、今日は授業の都合上8時からHRが始まるらしい。

「それじゃ呼ぶまでここで待っててね」

藤井先生に言われて2年1組のドアの前で待機することになった。教室内からは転入生がくるといいう知らせにテンションが上がっているのか生徒たちの声が聞こえてくる。よかった、楽しそうなクラスだな。

「それじゃ転入生を呼ぶから」

ガラッと扉が開き藤井先生が中に入るように促す。

俺はそれに従って教室に入り、教壇の横に立って生徒たちを見た。

——…なんだか女子生徒の視線が痛い程に集中しているのは気のせいだろうか。

何だ？俺制服似合っていないのか？

「それじゃ自己紹介してもらいましょう」

そう言われたので思考を一時中断して自己紹介に移る。

「えー九十九桜華です。学園都市には来たばかりで分からないこともあると思うけど仲良くしてやって下さい」

先生と話すときもそうだけど敬語って疲れる。前世じゃ脅迫言葉の
ほうがよく使ってたからなあ。

「はいじゃあ何か質問ある人ー」

藤井先生がそう言うクラス中（主に女子）からバツ！！と手が挙
がる。

「彼女はいますか！！」

「好きなタイプは！？」

「能力者ですか！？」

「どこに住んでるの！？」

「付き合ってください！！」

なんか一個おかしいのあっだろ今。

「多すぎるわね。今だけじゃ時間が足りないからまた休み時間にで
もしなさい。ではHRを終了します、皆移動してね」

それだけ言うと藤井先生は出ていってしまった。

「移動？」

「あ、九十九くんは知らないよね」

クラス代表だという女の子が話しかけてきた。

「システムスキャン今日から身体検査なんだよ」

第五話 7月11日（後書き）

ちなみに、

勝手に7月11日は木曜にしました。

7月20日から夏休みだというのなら土曜日じゃね？という勝手な
考えによるものです。

第六話 ファミレス（前書き）

はい、題名通りファミレス行きますよ。

第六話 ファミレス

あらすじ

何だか今日から身体検査で半日授業らしいよ。
システムスキャン

ということであ、九十九桜華は現在トイレにいます。
なんでかって？

アレイスターに電話してるからだよ。

『どうした』

「いや今日身体検査らしんだけどさあ、これってやっぱレベル1ぐらいに抑えるべき？」

『君は研究員たちの実験動物にされたいのか？』

「すいませんレベル1にします」

『間違っても君の本来の能力を大っぴらに見せびらかすような真似はするなよ』

「わかってるよ、じゃあな」

ピッ

「はあ、ちよつとは全力で能力使ってみたいと思ってたんだけどなあ……」

切り刻まれてホルマリン漬けにされたくはないので自重しよう。

トイレを出てグラウンドへと向かう。

「あら九十九君、遅かったわね。君の番よ」

担当が藤井先生だった。全く知らない先生よりはやりやすいよな。

「では葛城さん、よろしくね」

葛城さんとは先程俺に話しかけてきたクラス代表のことだ。

なんでも彼女はレベル3の風力使い（エアロマスター）らしく、俺の検査の為に能力を使用してくれるらしい。

「行くわよ九十九君」

「来い代表」

ゴオッ!!

と突風のような風が渦を巻いて一直線に俺へと向かってくる。レベル1設定なので身体ギリギリまで引き付けて消さなくてはならないのでなかなか緊張感がある。だって間違ったらこれ痛いじゃ済まないだろうよ。

「よっ、と」

俺は突風を身体から数センチの所で消滅させることに成功。

「葛城さん、九十九くんが続けられる限りやってちょうだい」

「わかりました」

その後四回程同じ動作を繰り返したあたりでギブアップを宣告し結果を待つ。

『記録——消滅限界回数、5／h。消滅限界範囲、4.8cm。総合評価——レベル1』

レベル1判定を受けて実験動物にならなくてすんだ安堵とレベル5を叩き出せなかった残念さが一度に襲いかかってきた。まあ退屈しない人生ならいいや、低能力者でも。

身体検査が終わり、俺は葛城クラス代表と話しながら教室へと向かっていた。ちなみに俺は代表と呼んでいる。

「九十九君の能力って便利よねえ」

「演算が複雑だからそんなに乱発できないけどな。代表のほうがすごいじゃんか、レベル3だろ？」

「レベル3なんてゴロゴロいるわよ。それに私はまだまだレベルを上げるつもりだし!!」

拳を握りながら宣言する代表。この性格なら御坂と気が合うかもしれないなあ。

「ところで九十九君」

「何だ代表」

「それよ」

「？」

「代表って呼ぶのやめてくれない？」

「何で？ 分かりやすくいいと自分では思ってたんだけど」

「……な、名前で呼んで欲しいから」

「そうか、なら葛城さん」

「——……もうそれでいいわ」

なんだか全てを悟ったような表情で空を見つめている葛城さん。何でそんな遠い目をしてるんだ？

半日ということもありそくさと授業が終了した柵川中学を出て、とりあえず学園都市を探索してみようと思い現在第七学区を途中で合流した初春佐天と共に歩いている俺。

「へー桜華さんの能力って便利そうですね」

佐天が俺の能力を聞いて感想を言う。

「そんな便利な代物じゃねえよ。使用回数だってあるし効果範囲は身体から数センチだし」

「でも能力を消滅させるってなんかカッコイイですね」

そう言う佐天は先程までとは違う雰囲気になっている。
そういえば佐天はこの後レベルアップとかいうのに手を出して意

識不明になるんだっけか。俺としては阻止したいけどあれは初春と佐天の友情が深まる大事なトコだしなあ。俺がそこに介入するわけにはいかないかな。

まあ適度に原作はぶっ壊すつもりではいるけどな。

「とりあえずどこか店に入りましょうか。外は暑いですし」

初春の提案に従って俺たちは近くのファミレスに入ることにした。

丁度昼時ということもあり店内は学生で賑わっている。

俺たちは窓際の席に向かい合って座り、オーダーをとりに来た店員さんに注文する。

「俺はハンバーグのAセットで」

「私はカルボナーラとアイステイ」

「私はジャンボチョコレートパフェとショートケーキで」

——……おい初春。

それは昼飯じゃないんじゃないか？

と不審な目で初春を見ていると向こうも気づいたのか目が合った。

??
何で目を逸らす？顔も赤いしやっぱり風邪でもひいてんのか？

「そういえば来週から夏休みだよ」

佐天が思い出したように切り出す。

「そうですね。宿題さえなければいいんですけどねえ」

初春は何だか遠い目だ。

「あ、でも私近いうちに白井さんに御坂さんと会わせてもらえるようになったんですよ!!」

先程の遠い目から一転して目をキラキラさせながら語る初春。そういえばお嬢様に異様に憧れてたんだっとな。

「えゝその人って常盤台のレベル5でしょお? ああいう人って人を下に見るじゃん? むかつくんだよねゝ」

「そんなことないですよお」

「だいたいお嬢様って……」

「いいじゃないですかお嬢様!! いえ、お嬢様だからいいんじゃないですかあ!!」

初春がどこかにトリップしてしまいました。とりあえずこっちの世界に呼び戻すか。

「初春ゝ、帰ってこゝい」

ムニツ

「ひゃわあッ!?!」

頬を引っ張ってこっちに呼び戻す。
って初春、なんで若干涙目なんだよ。

「おまたせしましたー」

そうこうしている間に注文した料理をウェイトレスさんが運んできた。

——…うん、やっぱり初春のはナイと思うわ。何そのボリューム、本人は笑顔で食ってるけどそれもう大食いにチャレンジするレベルのボリュームだかね。

「そういえば桜華さんて柵川中のマンションに住んでるんですね」

佐天がふと言う。

「ああ。初春の住んでる女子マンションの近くの男子マンションだ」

ハンバーグを口に放り込みながら佐天に言う。

「今度お邪魔してもいいですか？」

「おいしいぞ。何もないけどな」

「わ、私も行っていいですか！！」

いきなり大声で詰め寄ってくる初春。

何だよそんなに俺の部屋見たかったのか。

「もちろんいいぞ」

俺はそう言うのとセットについていたスープを飲んで一息つく。こんなまともに食事するの久しぶりな気がするなあ。

前は舎弟に弁当買わせに行ったりもしたけどこっちのいいな、うん。

そんなのほんとした平和な雰囲気は、ファミレスの入口辺りで叫んだ男の一言によって儚く崩れ去ることとなる。

「強盗だ!! お前ら動くんじゃないぞ!!」

——……ホントに、

なんでこんなイベントばかり発生するのかねえ……
俺の周りにはヤンキーと強盗しかいねえのか!!

第六話 ファミレス（後書き）

ちなみに桜華は超がつくほど鈍感です。

そしてヤンキーや強盗に対して極端にフラグ体質ですWW

第七話 え、もう？（前書き）

桜華ってどんなヤクザだったんだろうなあ（笑）

第七話 え、もう？

えーと、

俺たちのいるファミレスが強盗に占拠されました。

「動くんじゃねえ！！」

「ここから出るんじゃねえぞ！！」

「早く金を詰めろ！！」

まったく昨日からこんなのに巻き込まれてばかりだな俺。
好かれてんのか？

「う、初春……強盗だって……」

心無しか佐天の声が震えている。無理もない、予告もなしにいきなり命の危険がある現場に放り込まれたのだから。

「お、落ち着いて下さい佐天さん」

流石は初春。

ジャッジメント

風紀委員なだけはあってこういう突発的な出来事にも冷静に対応できている。

——……さて、

これからどうしようか。

敵は見たところ店内に8人、入口に2人の合計10人。

こっそり脱出するには少々無謀な人数だな。

幸いにも俺たちの座っている窓際の席から強盗たちが今集まっている会計近くの通路は対極に位置している為こちらに目は余り向かない。

「(初春、ここの監視カメラの映像パソコンに出せるか?)」

離れてはいるが一応強盗たちに聞こえないようにこっそりと初春に尋ねる。

「(あ、ハイ出すことは可能です)」

「(ならその監視カメラの位置から強盗たちの死角になりそうな所を探してくれ。後警備員にも連絡だ)」
アンチスキル

「わ、解りました」

そう言う初春はパソコンを膝の上に置いて極力強盗に見つからないよう静かにキーボードを叩く。

「(桜華さん、どうするつもりなんですか?)」

初春の隣に座っている佐天が心配そうに俺に尋ねてくる。

「(決まってるだろ、強盗たちを捕まえるんだよ)」

「(な、無茶ですよ!警備員が来るまで待ったほうが……)」

「(その前に逃げられちゃったら意味がないだろ)」

佐天を諭すように言う。

「（それに安心しろ。奴らが持つてる拳銃はただのモデルガンだ）」

「（そんなこと分かるんですか!?!）」

「（まあな。色々あって実銃には毎日触れてたからな）」

今一度言おう。

俺、九十九桜華は元暴力団、所謂ヤクザの幹部だ。

故に刀、拳銃、トンファーなどの武器については一般人を軽く凌駕する知識と経験を有している。

その経験から言わせてもらえば奴らが持っている拳銃は全てモデルガンだ。精巧に造られてはいるが所々に実銃とは明らかに違うパーツや箇所がある。更に言えば強盗たちの銃の構え型も素人ですと吐露しているようなものだ。もしあんな状態で本物の銃の引金を引いたら反動で肩が外れるだろう。

「（桜華さん、出ました。死角になるのはこの通路の角ですね）」

このファミレスのシステムに侵入し監視カメラの映像を写したパソコンの画面を俺に見せながら言う初春。

さすがは“ゴールキーパー守護神”、情報戦において初春よりも上のやつなんてアレイスターぐらいしかないのではないだろうか。

「（よし、今から俺はあいつらを捕まえに行く）」

「（ホントなら風紀委員として一般人のこういった行動は止めるべきなんですけど……）」

「（こういう場合はしょーがねーだろ。それに初春じゃ人質になるのがオチだしな）」

「（うう……）」

初春肉体労働はからっきしだからなあ。

というか女の子にこんなことさせる気なんてサラサラないけど。

一度強盗たちの方へと視線を向ける。

どうやら金を頂いて人質を取って逃走するつもりなのか人質にする人間を選んでいる。

（チッ、人質が取られてからだと面倒だな……）

そう思いゆっくりと行動を開始する。

気づかれないよう静かに席を立ち、初春が教えてくれた通路の角へと匍匐前進で移動する。

なるほど、確かにここからだとは強盗たちからは丁度見えないな。角までやってきた俺はこれからどうするか考えていた。

（今俺の中にあるのは結標の座標移動とチンピラの電撃使いか……よし）

頭の中で作戦を建てた俺はそれを実行するべく強盗たちの殲滅を開始する。

まず始めに狙うのはファミレス外の入口で見張りをしている二人。

こいつらは会計にいる強盗たちとは多少なり距離が離れているため瞬殺すれば異変には気付かないだろう。

——……というわけで、

ブオンツ

見張りをしていた男の一人の背後にテレポートし直ぐ様電撃をスタンガンの用に使って気絶させる。

レベル4クラスの電撃だ、そう簡単には目覚めたりしないだろう。

「ッ！？なん——」

もう一人が俺に気づいたが直ぐ様目の前にテレポートして同じ要領で気絶させる。

「うし、とりあえず第1段階はクリアだ」

気絶した二人が中の強盗たちに見つからないように足を持って身体を引きずりながら店の裏へと運ぶ。

「さて、次は——……」

俺は中の強盗を殲滅すべく店内へとテレポートした。

「よっと」

「「（うわぁ！？）」」

驚いて声を上げたのは強盗たちではなく目の前にいる初春と佐天だ。俺は先程のテーブルにテレポートしている。理由は単純、初春にやってもらいたいことがあるからだ。

「（初春、この店のカーテン閉めて照明落とせるか？）」

「（できますけど……何するんですか？　というか今のってテレポーター——）」

「（その話は後だ。とりあえず今はそれを直ぐにやってくれ）」

「（わ、解りました）」

言うやいなや初春が凄まじいスピードでキーボードを叩きあつという間にシステムに侵入。

自動開閉式のカーテンがゆっくりと閉まり始めた。

「なんだあ！？」

「誰がこんなことやってやがる！！！」

「探せ！！！」

突然カーテンが閉まり始めたら強盗たちだって気付くが、これはまあ仕方がない。

次の段階になればすぐにケリはつくだろう。

ガチャンッ

何かを落とすような音と共に、店内の照明が全て消えた。

「今度は何だ！？！」

「何が起きてる！！！」

「早く照明をつけろ！！！」

「誰がやったんだ！！！」

強盗たちが慌ただしくなる。

「（初春グッジョブ！！）」

そう言う俺は座っていたテーブルから強盗たちのど真ん中へとテレポート。

「よっ、お前ら全員皆殺しだぁ♪」

極めて明るく言い放つ。本心を言えば、「てめえら俺の平和を踏み滲りやがって生きて帰れると思うんじゃないぞ」だろう。

今度は入口にいた二人みたいに気絶させてハイ終わり、みたいにはしないぜ。

俺今めちやくちや苛々してるから。

「！？誰だお——」

強盗の一人がその言葉を言い切るよりも早く、俺は電撃を撃ち込んだ。

「ぎゃああああ！？」

黒焦げになって床に転がる強盗A。この程度で終わると思うんじゃないぞ。

ヒュンッ

と軽い音をたてて黒焦げの強盗Aが強盗Bの頭上へとテレポート。そのまま重力に負けて強盗Aの身体が強盗Bの脳天に直撃する。

「おうぶし!!」

強盗A（推定体重100kg）が脳を揺らした強盗Bは力無く強盗Aの下敷きとなり意識を手放す。
あと六人。

「な、誰だてめえは!!」

暗闇に少しずつ目が慣れてきた強盗たちが俺を見てモデルガン突きつけてくる。

はあ、こんなもん脅しにもなんねえよ。

ヒュンッ

と音をたてモデルガンを突きつけていた強盗Cのモデルガンには強盗Dのモデルガンが埋まっている。もちろん結標の能力だ。

「なあッ……!?!」

それ以上何もすることを許さずCを電撃でこんがりと焼く。
モデルガンを失った強盗Dには強盗Cの脳天プレスをプレゼントして気絶してもらった。

あと四人。

「ん……」

気づけば残りの四人に周りを囲まれていた。俺としたことが。

「ガキい……よくもやってくれたなあ!!」

強盗Eが叫ぶ。

「ぶっ殺す、てめえはぶっ殺す!!」

Eはモデルガンを床に捨て、ポケットからナイフを取り出す。

「チッ、いきなりエモノだしやがって」

「死ねおらあ!!」

ナイフをこちらに向けて突き出してくる。俺はそれをテレポートで避けEの後頭部上に移動、そのまま白井のようにドロップキックをぶちこむ。

一度やってみたかったんだよなーこれ。

「「うらあああ!!」」

む、次は強盗FとGが二人ががりか。

「甘いんだよ!!」

バリバリイッ!!

と御坂には及ばないが中々の高圧電流を二人に流し込み気絶させる。
あと一人。

「くそッ!!」

あ、逃げやがった!!
うわ、いつの間にか人質としてやがるし。

「動くんじゃないぞ!! 動けばコイツの命はねえ!!」

——…だがまあ、

コイツが馬鹿で助かった。

だって人質の女子校正に向けてるの、あのモデルガンだもん。

「はいどーん」

座標移動で人質の女子校正をこちらにテレポートさせ、それと入れ替わりになるようにして俺は男の懷の中にテレポート。

一瞬にして人質としてモデルガン突きつけているのが女子校正から九十九桜華に入れ替わる。

強盗Hはそのことに気がつき顔から血の気がサーツと引いていく。
対して俺は今日一番の笑顔で言った。

「くたばりやがれ」

バチィッ!!

直前電撃を打ち込み最後の強盗を気絶させる。

「……ふう」

一件落着して一安心しているとファミレス店内からワァッ!!と完成が巻き起こった。

「なんだなんだあ!!」

どうやら店内にいた客たちも暗闇に目が慣れてしまい桜華が強盗たちをなぎ倒していくのが見えていたらしい。

「あの、ありがとうございます!!」

先程人質に取られていた女子校正が頭を下げてお礼を言うてくる。

とそんな時に、

「風紀委員ですの!! おとなしくお縄に——……うえ？」

うん、場違い。

白井の決め台詞も不発に終わり何とも言えない空気が店内に流れる。

その後、駆けつけた警備員によって強盗たちは逮捕されて連れられていった。

店内にいた人達にもこの事件については他言無用ということで箝口令を敷き、各自帰宅の途についた。

——……ただ、

店内に俺と白井、初春、佐天を残して。

「……………」

冷や汗ダラダラで姿勢良く席に座る俺の向かい側には怪訝な顔の白井とビックリしている初春、そして目をキラキラしている佐天が横並びに座っている。

「――…さて桜華さん、どういふことか説明して頂けます？」

白井の目が怖い。

「――…何を？」

「惚けないでくださいな。初春たちの言っていることについてですわ」

「桜華さんてテレポーターだったんですか？」

初春が不思議そうにこちらを見ている。

「……違うよ」

「なら何故テレポートを？」

「話さないとダメか？」

「話して下さいな」

はあ、

と俺は大きく溜め息を吐く。

アレイスター、俺転生二日目ではれそうだわ。

やがて諦めたかのように、俺はゆっくり口を開いた。

第七話 え、もう？（後書き）

はい、ばれます

第八話 風紀委員（前書き）

自分でも想像しない方に話が進んでいく（笑）

第八話 風紀委員

「ここじゃなんだから風紀委員の支部に移動しないか」

開口一番、俺は目の前の三人に向かって言った。

「ここではいけませんの?」

「色々と話しづらいこともあるし、セキュリティがしっかりしてる支部なら盗聴の心配もないだろう」

「盗聴!?!」

佐天が驚く。

隣では初春も同様に目を白黒させていた。

「……聴かれてはマズイことなんですの?」

「まあな、それにお前らだって危険かもしれない。俺の話を聞く以上、ある程度の覚悟はしておけよ」

「……解りましたの。支部へ移動しましょう」

白井がそう言ったので俺と初春、佐天の全員が立ち上がり警備員がいるファミレスを後にして風紀委員第一七七支部へと向かう。

*

「さて、では洗いざらい吐いていただきますの」

支部の中、応接用の机を囲む四人は桜華と佐天、その向かい側に腕を組む白井とパソコンを起動させている初春が座る。

「何を聞きたいんだ？」

「まずはアナタの能力ですわね。書庫バンクの“自動消滅”オートデリートのレベル1という情報、これは偽造フェイクですわね？」

「――……何故そう思う？」

「アナタの事を少し調べさせて頂きましたの。書庫のデータには過去の情報は全くありませんし、なのに能力だけは記載されているなんて可笑しいですわ」

「で、極めつけはさっきの俺の行動か？」

「ええ、初春たちの証言によるとアナタは空間移動テレポートや発電系の能力を使用していたそうですわね」

ずいっ

と白井が詰め寄るかのように俺に顔を近づける。

近い近い、近いし目が怖い。

「単刀直入に聞きますわよ。アナタ、多重能力者デュアルスキルですの？」

「――……ぷ」

やばい、笑いが堪えられない。

「アッハッハッハ!!」

余りにも真剣な白井の表情を間近で見てとうとう我慢できずに笑い出してしまう。

「何が可笑しいんですの？」

「アハハ……いや悪い。余りにも真剣に白井が間違ったこと言うもんだから……」

腹を抱えてヒーヒー言いながら顔を机に埋める俺に白井は冷たい視線を送る。

「では一体アナタの能力は何なんですか？」

そろそろ白井がキレそうなので俺もふざけるのはよそうか。

「ふう」

先程までの雰囲気を払拭し真面目な表情になる桜華に白井や初春、佐天も顔を強ばらせる。

「もう一度だけ聞けど。本当に覚悟はあるんだな」

「愚問ですわね」

「はい」

「教えてください」

満場一致か。

仕方ないな。

「まず俺の能力だが、リダクションオーバー“超越還元”って代物だ」

「超越還元？」

「詳しくは俺も知らんがな。なんでも相手の能力を打ち消したり使用したりできる能力らしい」

「……それでレポートや電撃を使用していましたのね」

「ああ。まあいろいろ不便なところもあるけどな」

「レベルは何なんですの？」

「5だ」

「「レベル5!？」」

桜華の発言に初春と佐天が綺麗にハモる。

「でも何か事情があるらしくてな、表向きには俺はレベル1扱いなんだよ」

「どうして発表しないんですか？すごいことなのに」

隣で佐天が質問してくる。

「そこまでは知らないけどな、序列は“第零位”。裏のレベル5つてところだよ」

ギイッ

とあらかじめ説明できる事をし終えた俺はイスの背もたれに身を預けて天井を仰ぐ。

そこで今まで顎に手を置いて何やら思案していた白井が口を開いた。

「桜華さん、風紀委員に入る気はございません？」

「は？」

突然の提案に呆けた声が出てしまった。

「俺は面倒くさいことは嫌いなんだよ」

暴力団故の性格なのか、俺は面倒事が大嫌いだ。

「そんな悪い話ではないと思うんですの。非公式ではありますがレベル5のアナタが加入して下されば風紀委員としては願ったりですしアナタも余計なそこの不届きな輩に絡まれることも無くなりますわよ？」

「――……にしても確か風紀委員って半年くらい訓練しないといけないんだろ」

「その点は問題ありませんの。今回の事件を解決したのが桜華さんであることは警備員や風紀委員が承知していますしわたくしが推薦人として報告すれば訓練自体は免除されるはずですよ」

「ふむ……」

俺は別にそこらのチンピラどもに絡まれることは面倒だとは思っていない。

寧ろストレス発散できるのだから歓迎する。

だが昨日のように一日に何度もあんな事があると流石にイライラしてくるな。

「うーん……」

（俺が風紀委員になる、ねえ……考えてもみなかったな。頭の中は原作ぶっ壊すことといつ来るか解らない黙示録でいっぱいだったし……いやでも風紀委員になれば一般人よりも早く情報は入手できるんだよな）

「お前らは俺が風紀委員に居た方がいいのか」

白井と初春に質問してみる。

「桜華さん程の実力なら大歓迎ですわ。多少好戦的なのは多めに見ますの」

「そ、そうですね。私も桜華さんが風紀委員に入ってくれたら嬉しいです……」

白井と初春は同様に歓迎してくれるようだ。しかし初春、何故に顔を赤くしてもじもじしてるんだ。トイレか？

「……そうか。まあ風紀委員ても悪くないな」

「それでは――」

「ああ。俺でいいならやらせてもらう。此処なら退屈する暇も無さそうだしな」

ニヤッ

と俺は笑って向かい側に座る白井を見る。

白井もこちらを見て笑っていた。

ん？何だか白井の貼り付けたような笑顔に違和感を感じるんだが。

「では桜華さん、これにサインと必要事項を記入して下さいな」

バサアッ！！

と能面のような笑いを顔に貼り付けた白井が机上に風紀委員申込の書類を広げる。

「――……おい、こういうのは免除になるんじゃないのか」

「免除になるのは半年の訓練のみですわ」

俺の怒気の籠った問いにもしれっと答える白井。

コイツわざとやりやがったな。

「裏までびっしりあるじゃねーか！！」

「しっかり書いて貰いますわよ？」

昼食をとるためにファミレスに行ったのだが気づけば日が暮れていた。

昨日今日と巻き込まれすぎだろ俺。
いっそ引きこもってみるか？ いやそれだと下準備なんてできないよな。

頭を抱える俺には白井はニツコリと言い放った。

「書き終わる迄帰しませんわよ」

初春と佐天は書類の前にうちひしがれる桜華の姿に苦笑いするしかなかった。

第八話 風紀委員（後書き）

というわけで桜華は風紀委員になっちゃいました（笑）
原作開始はまだ先かなあ――……

早く黙示録書きたい；

第九話 7月16日（前書き）

ようやく原作開始です

第九話 7月16日

本日は7月16日（火）

いよいよ今日は超電磁砲の原作開始の日だ。

え？

いつの間にそんな時間たってるのかつて？

そこは気にしたら敗けた。

でもまあ風紀委員の書類を書いた日から何度か白井と一緒に学園都市を巡回してみたけどあんなに不良どもがいるなんて想像していなかった。

おかげでストックしてあった座標移動と電撃使いはもう使えなくなってしまった。

まあよく白井のレポートで移動するため座標移動についてはあまり後悔していないが。

そんなこんなで今日である。

今日も身体検査システムスキャンで半日授業であり、何やら初春がさっきからそわそわしている。

そういえば今日は初春や佐天が初めて御坂と会う日なんだっけか。

——…俺はこれまで何回か御坂に勝負を申込まれてるから一応顔馴染みだ。

嫌な顔馴染みだな……

「早く行きましょう佐天さん桜華さん!! お嬢様が待ってますよ!」

「いや初春、私今日は一はつしゅんの初回限定CDを買いに……」

「俺も今日は買い出し行かないと」

「そんなの後でもいいんです!! お嬢様は待ってくださいませんよ!!」

いや白井や御坂はいなくならねえよ、とツツコミたいが初春はそんなことより早く行きましょう!! と鼻息荒く目をキラキラさせているため佐天と二人で溜め息をつく。

仕方ないなあとかきつつ白井たちが待っているであろう例のファミレスへと向かった。

＊

「……オイこれはどんな状況なんだ」

思わず口に出して言ってしまった。

状況を簡単に説明しようか、——……ファミレス前まで行ってみれば何やら騒がしかったので店内を覗いてみたら御坂の膝の上にテレポートした白井が電撃を喰らっている場面に遭遇した。

周りの客や店員が明らかにひいている。

お、

白井が俺たちに気がついた。

……あ、

御坂も俺に気づいた。お願いだからそんなバツチンバツチンさせないで貰いたい。

どうやらこれから行く予定でもあったのか御坂と白井がファミレスから出てきた。個人的には冷房が適度に効いた店内でゆっくりしたかったのだが。

「ちょっとアンタ!! 何でアンタがここにいんのよ!!」

ズカズカと大股で歩み寄ってくる御坂。

「……はあ」

「なんで溜め息なのよッ!」

「俺はムリヤリ連れて来られただけだったの、勝負なんかしねえからそのバチバチしてんのやめろ」

ホント会うたびに勝負しろと申込むのは勘弁してほしい。

ジャッジメント

俺が風紀委員だと言っても信じてもらえてないし、上条さんの苦勞が少し解る気がする。

「あら桜華さんではありませんの」

「よッ、白井」

「黒子? コイツと知り合いなの!」

「知り合いも何も同じ支部の風紀委員ですわ」

「――…アンタ本当に風紀委員だったの？」

「だから言ったじゃねえかよ。あの時はまだ腕章が配布されてなかっただけだ」

「というかお姉様と桜華さんが知り合いだったというのがわたくし驚きですわ」

「ま、まあ色々あって」

「色々じゃねえだろ。御坂が一方的につっかかって……」

「うっさいわね！！アンタが逃げるのがいけないのよ！！」

「風紀委員が無闇に喧嘩なんぞできるか！！」

「あの～……」

今まで完全に空気だった初春が申し訳なさそうに言った。

「というわけで、とりあえずご紹介しますわ。」

白井がそう言うので御坂は俺につっかかるのを止めて白井の隣に下がる。

「こちら柵川中学一年、初春飾利さんですの」

「は、初めまして。初春飾利です」

「それから……」

「どーもー、初春のクラスメートの佐天涙子です。何だか知らないけどついてきちゃいましたー。因みに能力値はレベル0です」

「さ、佐天さん何を――」

「初春さんに佐天さん、私は御坂美琴。よろしく」

「でこちらが……」

「九十九桜華です。何だか知らないけどついてきちゃいました。因みに能力値はレベル1です」

佐天の自己紹介を真似てお茶目にやってみたのだが、

「アンタは私を舐めてんのかああ!!」

バチバチィ!!

ざっと2億ボルトほどの電撃を浴びせられた。まともに喰らえば間違いないで死ぬのもちろん還元したが。

「お姉様……」

「いい加減諦めろよ御坂!。お前の攻撃効かないんだからさ」

「う、うるさいわよ!!」

話が進まないの俺と御坂の攻論（え?字が違う?いや合ってるよだって御坂だもん）は割愛。

「ま、こんなところにいてもしよーがないし。とりあえずゲーセン行こっか」

「ゲーセン、ですか?」

佐天が鳩が豆鉄砲くらったような顔をしている。

「ほら黒子行くよー」

「もう、お姉様ったらゲームとか立ち読みではなくもっとうお花とかお琴とかご自身に相応しい趣味をお持ちになれませんの？」

「うっさいわね。大体お茶やお琴の何処が私らしいって言うのよ」

「……なんかさ、全然お嬢様じゃない？」

奇遇だな佐天。

俺もつくづく思ってたところだ。

「上から目線でもないてすねえ」

初春が何やら紙を見ながら言う。

「？何それ」

「新しいクレール屋さんみたいですわね。先着100名さまにゲコ太マスコットプレゼントって」

「何このやつすいキャラ。今時こんなのに食い付く人なんて……」

ドンッ

佐天が立ち止まる御坂の背中にぶつかった。御坂も初春と同じ紙持

ってるな。

「すみませ——……ん？」

「御坂さん？」

「どうなさいましたのお姉様……あらあ？クレープ屋さんにご興味が？それとも、もれなく貰えるプレゼントのほうですか？」

「な、何言ってるのよ！私は別にゲコ太なんか。だって蛙よ？両生類よ？どこの世界にこんなもの貰って喜ぶ女の子が——……」

「「あ」」

初春と佐天が同時に気づいて声がでる。

目線の先は、もちろん御坂の学生鞆に付いているストラップなわけで、それに気づいた御坂は顔を赤くしているし白井は必死に笑いを堪えている。そう言う俺は大爆笑しているが。

「うわー、すっごい人」

やってきた広場には学園都市見学にやってきた子供たちが大勢集まっていた。

確か休憩でここに立ち寄ったんだよな、というかバスがここに停まらなきゃ佐天は顔を蹴られなくて済んだんじゃないか？

「タイミングが悪かったみたいですやね」

列の最後尾に並びながら初春が苦笑しながら言う。

「先にベンチを確保してまいりますわ」

「あ、じゃあ私も。佐天さん、私たちの分もお願いしますね」

「え、ちよっ——……あ」

佐天が振り返ってみればそこには腕を組んで落ち着きなく指をトントンしている御坂の姿。

「え？何？」

「いいえ……」

「佐天、御坂はこういう奴だから」

御坂の後ろに並んでいる俺は佐天に言う。

「——……あの、順番替わります？」

パアッ

と御坂の顔が晴れやかになる。

「あ、別に私は順番なんて……私はクレープさえ買えたらそれで……いい」

俺たちの隣を走り去っていく子供たちの手にあるゲコ太につい目がいつていもう御坂。

「お待たせしましたー。はい、どうぞ」

店員さんが佐天にクレープと一緒にゲコ太を渡す。

「最後の一個ですよ」

「どうも……って、え？ 最後？」

ドサァッ

佐天がそう言った直後、俺の目の前で御坂が項垂れた。
なんだよやっぱ欲しかったんだな。

その身体からは悲壮感が漂っている。

「……あ、あのお」

見るに見かねた佐天が御坂にゲコ太マスコットを渡す。

「よかったらこれ」

「え！？ いいの！？ ホントにいいの！？ ありがとう！！！」

「おい御坂早くクレープ買ってくれよ、後が詰まってる」

「あ、そ、そうね。佐天さんありがとう！！」

先程までの悲壮感はどこへやら満面の笑みでクレープを買う御坂。

そのままスキップで白井たちのところへっ向かっていった。

ベンチに座りながらクレープを食べる。

ん、まあまあだな。

因みに俺は甘いものが苦手なので生クリームとかチョコとか一切入っていないクロックムッシュを注文した。

目の前では白井が御坂に自分のクレープを食べさせようと走り回っている。

「よかったですね」

「え？」

「御坂さん、お嬢様のイメージとはちよつと違ったけどずっと親しみやすい人で」

「ん……どうなんだかねえ」

「そういえば桜華さんは御坂さんと知り合いだったんですか？」

「ん？まあ知り合いっつか会うたびに勝負挑まれてたらしいの間にかこんな感じになってたんだよな」

クレープを食べながら勝負を挑まれるたびに逃げ回ったことを思い出す。

あれ？何でかな、涙がでるよ。

「ん？」

初春が後ろの通りを見ながら何か気づいたように言う。

（チッ、やっぱりこうなるのか）

俺は人知れず舌打ちする。退屈しない人生は送りたいがそれによって佐天みたいな一般人が傷つくのは嫌なのだ。前世でもカタギには手を出さなかったしな。

「どうしたの初春」

「いえ、あそこの銀行なんですけど……何で昼間っから防犯シャッター下ろしてるんでしょうか」

初春がそう言った瞬間、

ドガアアアンツ！！

いきなり防犯シャッターが爆発した。

「え！？なんなの！？」

佐天が耳を押さえて状況を把握しようとする。白井はすでに風紀委員の腕章を取り出しベンチを踏み台に通りへと飛び出して行く。俺もそれに続いて通りに飛び出す。

「初春！！アンチスキル警備員に連絡だ、それと怪我人の有無の確認。急いでくれ！！」

「は、はい！！」

「黒子！！」

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持はわたくしたち風紀委員のお仕事、今度こそお行儀よくしててくださいな」

そう言って白井と俺は走り出す。

「まったく昼間っから強盗なんてくだらないことしやがって」

「桜華さんは銀行内の状況を調べてくださいな。わたくしは犯人を取り押さえます」

「おう、気をつけろよ」

「もちろんですわ」

そう話していると銀行の中から犯人であろう三人が出てきた。俺はそいつらを白井に任せて銀行内に入っていく。

「風紀委員だ！！怪我人はいるか！？」

中を見回してみると幸い爆発はシャッターを壊すただけに使われ
たらしく従業員や客にケガをしている者はいなかった。
俺はとりあえずの安全を確認し、従業員の一人に現場の説明を求め
る。

「いきなり強盗たちが入ってきて……金を出せと」

「さっき出ていった三人だな」

「いえ……」

「？」

「強盗は五人です」

「！！くっそこんなところでオリジナル設定いらねーんだよ！！」

急いで銀行を出て残り二人を探す。

白井のほうを見てみれば二人目の強盗を地面に礫にしているところ
だった。

御坂たちのほうはやはり居場所が解らなくなった男の子を探している。

「チッ、残り二人はどこに行きやがった……!!」

周囲を見回すが強盗の姿は見つけられない。
と、何やら車のエンジン音が聞こえてきた。

（三人目が車に乗り込んだのか!?!）

もしそうであれば佐天が顔を蹴られ御坂がぶちギレな場面なのだが、
違った。

御坂たちはまだ男の子を探している。

「……オイオイそういうことかよ!!」

エンジン音がしたのは御坂や白井たちとは反対の道路。
その曲がり角から猛スピードで車が現れたのだ。

「二人は足を確保してたってことか」

桜華は車の行く手を塞ぐべく道路のど真ん中に立つ。

車をどう止めようか考えていたら唐突に後ろからもエンジン音が聞こえてきた。

振り返ってみれば三人目が車に乗り込んでこちらに向かってきていた。

既に御坂は紫電を走らせ迎え撃つ気満々で立っている。

「そうだ。御坂!!」

「なによ!!」

距離が少し離れているため自然と声が大きくなる。

「コイン一枚貸してくれ!!」

「何に使うのよ!!」

「いいから早く!!このままじゃ俺轢かれる!!」

「解ったわよ!!」

御坂はポケットからコインを二枚取り出し、一枚を桜華のほうへと投げる。

それを受け取った桜華と御坂がコインを弾いたのはほぼ同時。

ピイン

という甲高い音をたてて宙を舞う二枚のコインはやがて重力に負けて落下を始める。

白井と磔にされた強盗が何やら言っているがここからではよく聞き取れない。

向かってくる車に向かい、俺と御坂は落ちてきたコインを撃ち出した。

——……ドゴオオンッ!!

閃光を撒き散らしながらフレミングの法則によって音速の三倍の速

さで発射されたコインは轟音とともに車に直撃し強盗たちを乗せたまま軽やかに宙を舞う。

レールガン
超電磁砲

御坂美琴の代名詞と言える必殺技を俺は放ち、強盗を仕留めた。宙を舞った車はお互いが空中で衝突してそのまま地面に激突、中の強盗たちは気を失っていた。

「――……はあ」

強盗を警備員に引き渡した後、俺は盛大に溜め息をはいた。

「疲れた、いやこれといってなんもしてないけど」

「お疲れさまでした桜華さん」

初春が劳いの言葉をかけてくれる。佐天はやはり顔を蹴られたらしく頬に湿布を貼っていた。

「桜華さんの能力はお姉様の超電磁砲まで使用することができますのね」

警備員との話を終えて戻ってきた白井が驚いたように言う。

「ちょっとアンタ！！本当にレベル1なわけ！？」

先程まで佐天と話していた御坂がものすごい剣幕でこちらに詰め寄ってくる。

「白井、俺逃げるから後よろしく」

それだけ言い残して俺は御坂から逃げるべくテレポートでこの場から離脱する。

「あ！！待てこら逃げんなー！！」

夕暮れの学園都市に御坂の叫びがこだました。

第九話 7月16日（後書き）

感想お待ちしています。

第十話 7月17日（前書き）

全然投稿出来なくて申し訳ありません……
そして短いです……

第十話 7月17日

「グラビトン虚空爆破事件？」

午前授業を終えて風紀委員第一七七支部にやってきた桜花は白井からその事件の名を聞いた。

（あれか……確か上条さんが幻想殺し（イマジンブレイカー）を使って皆を助けた事件だよな）

「桜花さん？」

考え事をしていた俺に白井が呼び掛ける。

「ん、ああスマン。続けてくれ」

「ラビトン実際に学生に被害が出たのが昨日ですの。固法先輩が向かった重子力の爆発的な加速が観測されたコンビニで同僚の風紀委員が一般人を庇って重傷を負いましたわ」

デスクに座って難しい顔をする白井。おそらく犯人の手掛かりが掴めていないことに焦っているのだろう。

俺は詳細を原作知識で知っているが一応生の情報を得るために白井に尋ねる。

「それってどういう能力を使ってるんだ？」

「アルミを基点にして重力^{グラビトン}力の数ではなく速度を急激に増加させ、それを一気に周囲に撒き散らす。要は『アルミを爆弾に変える』能力ですの」

「……成程な」

どうやら犯人は原作と同じ人物らしい。

昨日の銀行強盗の一件で全てが原作通りに進むわけではない、ということが解ったため、原作と同じような状況になるかは解らないが。

「ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきますの」

デスクに並べられた事件に使用されたアルミの残骸に目をやりながら白井が言う。

「爆発の前に前兆があるので死亡者こそ出ていませんが……まだ犯人の特定ができていませんの」

「書庫^{バンク}を洗えばその能力を持ってる奴が割り出せるんじゃないのか？」

事のあらましを知っている俺が何故こんなことを聞いたのかと言うと、この事件を皮切りに幻想^{レベルアップ}御手事件に繋がるのかを確認したかったからだ。

この事件が発生している時点ではば確定だが、一応知っておいたほうがいいと思ったのだ。

「……妙なのはそこですの」

腑に落ちない、といった表情で白井が、

「『シンクロトロン量子変速』。それも爆弾に使用できる程に強力な能力者となると、学園都市にはレベル4の釰路帷子という生徒ただ1人しかいないんですの」

「ならそいつが容疑者じゃねえのか？」

「それが……一連の事件の始まりは1週間前なのですが、彼女は8日前から原因不明の昏睡状態に陥っていますの」

（……決まりだな）

「病院からの外出はおろか一度も意識を取り戻しておりませんし、医療機器にも記録が残っていますから、彼女に犯行は不可能ですよ」

「書庫のデータが間違ってるってことか？」

「あるいは桜花さんのように偽装されているのかもしれませんが」

「俺の場合はイレギュラー過ぎるからな。俺以外にそんな奴がいるなんて考えられねえよ」

「ですが……」

「それより可能性としてあるのは短期間で急激に力をつけた能力者とかだろ」

「それは薄々わたくしも考えてはいたんですが、滅多にないケースですし……」

「その滅多にないが今起きてるのかもしれないだろ？」

後頭部のところで腕を組みながら俺は言う。

（さて、どうする……とりあえず初春と佐天がセブンスミストに行くのはまずいな。時間は……まだ間に合うな）

「白井、初春に連絡とってくれるか？」

「え？ ええそれは構いませんが、どうするんですの？」

「理由は後で話すから今は初春に連絡だ。すぐに佐天を連れて此処にくるように言ってくれ」

「はあ、解りましたわ」

白井は携帯を取り出し白井に連絡をとる。これで初春と佐天が事件に巻き込まれることは回避できた筈だ。

（後は俺が直接セブンスミストに行って介旅を叩くか？ あそこには御坂と上条さんも居る筈だし、御坂に協力してもらえばすぐに捕まえられそうだ）

「桜花さん」

「ん？」

「初春たち、セブンスミストに行ってからでもいいかって言うの」

「ダメだ」

「ダメらしいですわ初春」

『-----』

「こちらに来るそうですわ」

通話を終えた白井が俺に報告してきた。

これで問題はないはずだ。いくらイレギュラーが発生してもまさか風紀委員の支部で爆発はしないだろう。

ということとは……

俺は座っていた椅子から立ち上がり、ドアへと向かう。

（俺が直接介旅を叩く……！！）

「桜花さん？どこに行くんですの？」

何処かへ向かう桜花を見て白井は問い掛ける。

「白井は初春たちがやって来るのを此処で待ってろ」

「桜花さんは……？」

「一仕事してくる」

白井が何かを言う前に、俺はドアから外へと出た。

さあ、お前が何処にいるのかは知らないが、初春がセブンスミストに向かわない以上セブンスミストに爆弾を置く事はしないだろう。見つけ出して取っ捕まえるぜ、介旅初矢。

俺は炎天下の学園都市を走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229q/>

とある学園都市で学園黙示録

2011年6月16日10時18分発行